

両毛漁協梅田湖ワカサギ増殖計画情報

桐生タイムス H24. 5. 14 掲載

上毛新聞 H24. 5. 19 掲載

両毛漁協

H24. 5. 14 掲載

「諏訪湖方式」を導入

梅田湖で県内初の取り組み

ワカサギふ化率向上、経費削減も

両毛漁業協同組合（中島淳志組合長）は、桐生市梅田町五丁目自の梅田湖で、ワカサギの卵をふ化させるための新しい方法を導入した。ワカサギ釣りのメッカで卵の供給地としても知られる諏訪湖（長野県）で開発された「筒式」と呼ばれる方法で、従来の方法に比べ、放流までの手間や経費が大幅に削減でき、ふ化率も飛躍的に高まるという。こうした取り組みは県内初といい、漁協では10月のワカサギ釣り解禁に向け、梅田湖の釣り人気が高まることを期待している。



き、活卵のみを抽出した状態で出荷される。両毛漁協はこの分産卵を入荷し、梅田湖畔に設置した高さ約1.5m、直径約15cmの塩ビ管の円筒の中に放流する。円筒の下からポンプで吸い上げた湖水が流入し、上から細かいパイプを通して水が湖に戻る仕組みで、毎分3〜4リットルの水が循環する筒

の中を卵をふ化させ、ふ化した稚魚はパイプを通過して湖に流れ出る。従来の、木枠に張ったシロロの繊維に受精卵を付け、それを湖に沈める「シロロ枠方式」が主流で、両毛漁協も長年この方法を採用してきた。だが、シロロ枠の設置や補充が難しく、維持費がほぼゼロになるほか、90%近い卵がふ化するとの実験データもあり、飛躍的な効率化が図れるのがメリットという。

筒式なら、いったん装置ができれば半永久的に使い、維持費がほぼゼロになるほか、90%近い卵がふ化するとの実験データもあり、飛躍的な効率化が図れるのがメリットという。

両毛漁協は10日、手作りの装置を作り、分産卵100万粒を試験放流した。卵は約1週間ほどふ化し、魚探探知機でふ化状況を確認する方針。中島組合長（40）は「この方法でやってみて、うまくいけばシロロ枠方式から筒式に移行し、将来的には二つの方式を半々にした」と話す。

後制版 5000円

新装置 桐生・梅田湖で県内初導入

H24. 5. 19 掲載



ワカサギ増やせ

ふ化率向上、コスト減

両毛漁業協同組合（中島淳志組合長）は、桐生市梅田町の梅田湖に、ワカサギの卵をふ化させる筒形の新装置を設置した。中島組合長は「ふ化率が向上し、放流の手間や人件費が大幅に省ける」と効果を期待している。ワカサギ釣りの解禁は10月初めの予定。

長さ1.2m、直径16cmの塩ビ管の円筒の中に卵を入れ、円筒の下からポンプで湖水を吸い上げる。水が循環する中でふ化させ、稚魚がパイプを通過して湖に流れ出る仕組み。卵は、諏訪湖漁協が開発した吸着成分を除去した受精卵を使う。

筒形の新しいふ化装置を設置した両毛漁協の中島組合長

両毛漁協によると、この方式の導入は県内漁協では初めて。湖畔に装置を設置後、3〜5日ほどでふ化が始まっている。

これまでは、ワカサギの卵の吸着性を生かすし、木枠に張ったシロロ繊維に受精卵を付け、容器を湖に沈める方式を取っていた。しかし作業に膨大な時間と人手が必要で、かびの発生などからふ化しないことも多かったという。

（佐藤孝昭）